

日本近代文学会 東海支部 第30回研究発表会

〈介護小説〉は何を描いてきたのか

第I部 基調講演 (14:00～) *13:30 開場

落合恵子氏 「母に歌う子守歌……その後」

(講演終了後、落合氏の著書販売およびサイン会を行います)

第II部 シンポジウム (15:00～)

〈介護小説〉は何を描いてきたのか

- ◇ 「高齢者介護にまつわるジェンダー的諸問題」 司会・米村みゆき
- ◇ 「耕治人と青山光二の介護小説—〈記憶〉の危機」 佐々木亜紀子
- ◇ 「家族介護を描いた作品を読む—介護の動機付けとなる「意味」をめぐって」
山口比砂
- ◇ 「介護を語る「文学」／文学を語る「介護」」 杉田智美

◆落合恵子氏プロフィール◆ 1945年栃木県生まれ。作家。明治大学文学部英文学科卒業後、文化放送にアナウンサーとして入社。「セイ!ヤング」などのパーソナリティを担当。文化放送を退社した後に作家活動に入り、児童書籍専門店「クレヨンハウス」を開き経営を行うほか、近年はフェミニストとしての視点から女性や子供の問題についての評論・講演活動を積極的に展開している。著書には『犬との10の約束』(2004)、『母に歌う子守唄 わたしの介護日誌』(2004)、『母に歌う子守唄 その後 わたしの介護日誌』(2008)などがある。

◆企画趣旨◆ 高齢社会の到来によって、「介護」は専門家と特別な一部の当事者の問題ではなくなってきた。介護の担い手が、介護・看護の現場において直面するのは、介護するものとされる側の相互行為、コミュニケーションの問題である。小説という媒体を扱うことで、それぞれの専門家(ケースワーカー、ソーシャルワーカー、看護師 etc.)の技術・知識において空洞化している「被介護者/介護者」のコミュニケーションにかかわる問題意識等を立ち上げてみたい。介護を扱った小説が、特権的に描いてきたのは、介護の描写ではなく、介護を担った者の苦悩の姿である。それは、ジェンダー、記憶、語りの視点、動機付けの歴史的要因等を介在しつつ、様々な意味のレベルが存在する。〈小説〉という媒体を通すことで、介護はどのような様相をみせるのか。あるいは、どんな題材を反復し、そのことによって何に手を貸してきたのか。新たな問題設定や苦難を解く手がかりは見出せるのか。

2008年3月23日(日) 愛知淑徳大学 星が丘キャンパス 12A教室

入場無料(どなたでもご参加いただけます) 事前申込不要 駐車場はありません

名古屋駅より地下鉄東山線「星ヶ丘」(18分)、星ヶ丘駅(3番出口)から徒歩3分

日本近代文学会東海支部事務局 千種区桜が丘23 愛知淑徳大学文化創造学部 永井聖剛研究室内 nagaiki@asu.aasa.ac.jp